

高齢者交通外傷例の鑑定

東京女子医科大学 法医学教室 澤口 彰子

高齢化社会になるにつれ、司法剖検業務でも、高齢者の交通事故死例が増加している。特に、痴呆を伴っている場合、事故と死因との因果関係が賠償上問題となることが多い。

今回、このような社会情勢を考慮して高齢者の交通事故死鑑定例について、上記の問題をふまえて報告する。

【対象及び方法】私共の大学で1993年1月から1995年3月までの間に司法解剖・鑑定を行った交通事故死例のうち、40歳以上の10例を対象とした。これらの年齢、事故から死亡までの生存時間、事故状況、剖検所見などの関係を検討し、更に事故と死因との因果関係に痴呆が係わっているか否かをみるために、脳の免疫組織化学的検索を行った。

免疫組織化学的マーカーとしては、痴呆化あるいは老化の比較的初期に出現し、それらの出現に何らかの因果関係があるとされるアミロイドβ蛋白及びタウ蛋白を選択した。

【結果及び考察】本対象例のうち、男性は80%、女性は20%であった。80歳以上の高齢者は40%と多く、その半数が長期生存者であった。次いで50

歳代と40歳代が各20%であった。

単独事故は1例もなく、歩行者の事故が計80%（歩行者対普通乗用車：40%、歩行者対貨物車または自動二輪車：各20%）と多かった。事故車両は普通乗用車が最も多かった。24時間以内の短期生存者は年齢に関係なく、いずれも轢過例であった。

頭部外傷は痴呆発症の危険要因の一つとしてあげられており、脳の免疫組織化学的变化において、痴呆あるいは老化例があることはすでに知られている。又、アミロイドβ蛋白を主成分とする老人斑は正常人でも40歳を越えると脳組織に確認されるようになる。そこで対象例のうち、頭部外傷及び高度動脈硬化がみられた事例について、脳の免疫組織化学的検索を行った。アミロイドβ蛋白陽性反応はほとんどの事例にみられたが、タウ蛋白陽性反応は事故前に痴呆が疑われた事例及び長期生存者例にみられた。即ち、タウ蛋白は事故前の痴呆の証明のみでなく、事故後の痴呆発症の検索にも応用されうると考えられる。